

昭和58年度

上野廃寺発掘調査概報

和歌山市上野所在

昭和59年3月31日

和歌山県教育委員会

序

本書に纏めた史跡上野廃寺は、双塔の寺院跡として早くから耳目を集め、大和藤原京の本薬師寺、平城京の薬師寺との伽藍の類似から、紀伊薬師寺とも呼ばれてきた奈良時代建立の寺院跡であります。

和歌山県教育委員会では、遺跡の保護資料作成のため紀伊国分寺跡をはじめ、重要遺跡確認調査として古代寺院跡の発掘調査を実施してまいりました。

本年度より発掘調査に着手しました上野廃寺についても多大の成果をあげることができました。ここに、その発掘調査の概要をとりまとめ刊行いたしました。本書が県民の皆様のみならず、学界にも貢献することができれば幸いと存じます。

発掘調査の遂行、本書の刊行に際し、御理解と御厚意を賜った関係各位に対し、改めて厚く御礼申し上げます。

昭和59年3月31日

和歌山県教育委員会

教育長 高橋正司

例 言

1. 本概報は、昭和58年度史跡上野廃寺発掘調査の概要をとりまとめたものである。
1. 発掘調査に際し、上野廃寺発掘調査委員会を組織し、和歌山県文化財保護審議会埋蔵文化財部会の岡田英男、羯磨正信、巽三郎、都出比呂志、藤沢一夫委員を発掘調査委員に依頼した。
1. 発掘調査は、調査委員会の指導のもとに和歌山県教育委員会文化財課主査藤井保夫が担当し、社団法人和歌山県文化財研究会技術員渋谷高秀、井石好裕、佐伯和也が補佐した。
1. 発掘調査にあたっては、奈良国立文化財研究所森郁夫氏の指導を得た。
1. 本概報の作成は、発掘調査委員会の指導のもとに藤井があたった。

目 次

1. 調査経緯	(1)
2. 位置と環境	(1)
3. 調査方法と調査地点	(2)
4. 伽藍配置と主たる遺構	(3)
5. 出土遺物	(5)
6. 小 結	(6)

図 版 目 次

図版第 1 位 置	図版第 6 講堂址(一)
〃 第 2 金堂址(一)	〃 第 7 講堂址(二)
〃 第 3 金堂址(二)	〃 第 8 灯籠 址
〃 第 4 西塔 址	〃 第 9 遺物写真
〃 第 5 東塔 址	〃 第10 軒瓦拓本実測図

1. 調査経緯

上野廃寺は昭和26年に東塔址周辺が史跡指定されていたが、昭和42年に寺域周辺で宅地開発工事が計画・実施された。このため、和歌山県教育委員会では奈良国立文化財研究所の協力を得て、史跡指定地に南接した地域の発掘調査を同年9月に実施し、中門基壇の南辺と回廊の基壇基底部、参道などが確認された。^{註①}直ちに、これら遺構の検出された地点を買収し、伽藍中枢部への開発を喰い止めた。昭和44年には、金堂・西塔址ほかの周辺部が追加指定された。また、東部からの開発に対処するため、昭和45年度事業として文化庁の補助金を得て、東塔址の東部・南部を買収することができた。

しかしながら、上野廃寺には、県下でも屈指の秀麗なる蓮華文軒丸瓦が用いられていたため、こうした間にも考古マニア等により、金堂址・西塔址を中心に悪質な盗掘が相つぎ、一時は西塔址の瓦積基壇が露呈するまでに至ったこともあった。また、昭和50年代に入り、一部の地主から史跡の買上げの要求もあったが、遺構の不明地点については発掘調査を実施したうえで買収していく方針をたて発掘調査を先行させることになった。

そこで、県下における重要遺跡確認調査事業として本年度より数年計画で発掘調査を実施する運びとなり、準備期間のあと、昭和59年1月より発掘調査に着手したもので、同3月31日埋戻しを完了して、昭和58年度事業を終了した。

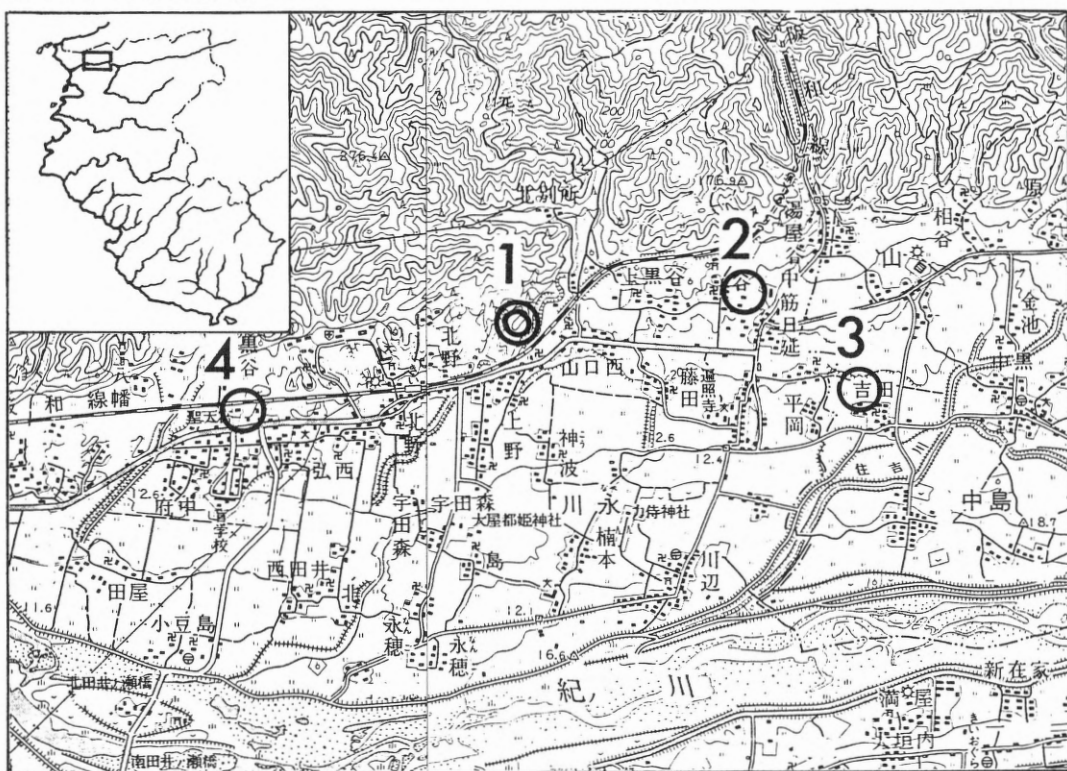
2. 位置と環境

上野廃寺は、和歌山市上野536番地ほかに所在し、旧名草郡の東部に所在する。紀伊と和泉とを界する和泉山脈の南麓、標高約40m地点を占め、南面して建立されている。遺跡の南側は舌状の台地状地形が南方へ伸び、門前としてふさわしい地形である。さらに南には紀の川、あるいは紀の川の氾濫による肥沃な低温地が拡がり、紀の川下流域のいわば穀倉地域である。現在もN-10°-E方向の条里遺構が広く看取できる。

弥生時代から古墳時代にかけては、条里遺構がみうけられる地域の微高地に、田屋、北田井、宇田森遺跡などの集落遺跡が点在し、耕地開発の早かったことを示している。古墳時代も5世紀に至り、紀の川筋が大和への重要な交通路として大きなウエイトを占めるようになり、古墳時代の終焉と共に大阪湾、あるいは紀伊水道方向から大和へ至る官道としての性格をもち始めるのは当然の帰結であったものとみられる。7世紀後半代になると、これに面して多くの白鳳寺院が建立され、上野廃寺の他、東約1.5kmに山口廃寺（和歌山市谷）や、那賀郡内では西国分廃寺、北山廃寺、最上廃寺、伊都郡内では佐野廃寺、名古曾廃寺、神野々廃寺などが造営されていく。大宝二年（702）には「始置紀伊国賀陀駅家」（現、和歌山市加太）（続日本記）とあるように南海道の整備の状況がうかがわれる。

また、紀の川筋のみならず、上野廃寺より北東約3kmの雄ノ山峠越は和泉との重要な交通路であり、紀伊国風土記逸文に「ツツカユミ（手束弓）トハ、紀伊国ニ有、風土記ニ見タリ、弓ノツツカ（手束）ヲ大ニスル也、其ハ紀伊国ノ雄山ノセキ（関）守ノ持也ト云ヘル」とあり、雄ノ山峠を下った地点に位置する那賀郡岩出町吉田所在の吉田遺跡で確認された奈良時代の諸遺構は、「駅家」的な性格が考えられるなど、上野廃寺周辺は交通の要衝としても大きなウエイトを占めている。また、紀伊国分寺は上野廃寺の東方約8kmの那賀郡打田町に造営され、西方約2kmの和歌山市府中を中心とした地域に国府が設置されたものとみられ、その規模や内容など不明の点が多いが、藤原為房の「大御記」によれば、永保元年（1081）雄ノ山峠を越え国府南道を径て日前、国懸社へ参拝しており、奈良時代はともかく平安時代後期の11世紀では府中周辺に国府が置かれていたことは確実に、律令時代の紀伊国では最も重要な地域であったことはいうまでもない。

第1図 位置と環境



1. 上野廃寺 2. 山口廃寺 3. 吉田遺跡 4. 国府推定地 (5万分の1)

3. 調査方法と調査地点

発掘調査を実施するに当たって、遺跡の測量を百分の1縮尺で行いトレンチの設定などを検討した。これに従って、東塔と西塔の各心礎間の中点に調査の地区割りの原点をおき、東塔と西塔の心

礎を結ぶ線、及びこれに直交する南北線、つまり伽藍計画の地割り方向にそって座標軸を設定し、これに沿って幅3mのトレンチ等を設け、約540㎡の発掘調査を実施した。

金堂址には、すでに動かされ原位置を保っていない数個の礎石のほかに、原位置を保つのではないかとみられる数個の礎石が幕末頃に建てられた薬師堂基礎の下などに遺存していた。これの内1基をトレンチにかかるようにし、礎石抜取りあるいは基壇縁の確認を主眼に調査を実施した。礎石がもっともよく遺存するとみられた西塔址は基壇上面の精査と基壇東辺の確認を主眼に調査区域を設定した。破壊の著しい東塔址は心礎を中心に南北方向のトレンチを設定し、基壇南辺の調査を行った。中門址は基壇の北西隅の確認を目標としたが十分な成果が得られなかった。また、西塔址の西側の平坦地にも遺構の有無の確認のためトレンチを設定し、講堂址が検出されたため、その規模あるいは構造を確認するためトレンチの拡幅・拡張、あるいは新たに調査区域を設定した。さらに金堂正面部に設定したトレンチは灯籠あるいは参道などの諸施設の有無を確認するためのものであった。

4. 伽藍配置と主たる遺構

伽藍配置 前述の調査地点の成果から、東塔と西塔間40.65mの midpoint (O点と仮称する)を中心に、伽藍配置が計画されたようである。つまり、O点を中心に20m強北側に金堂の中心、同じく20m東方に東塔心礎、同西に西塔心礎、同南に中門の中心を置いている。また、西塔心礎より西方へ20m強で講堂の南北軸を設けているようである。

金堂 (図版第2・3)

桁行五間、梁行四間で、基壇上に遺存する礎石間隔は身舎柱間約245cm、庇部柱間(梁方向)約257cmを計るが、後者には検討の余地がある。礎石は紀の川南岸に産する蛇文岩を用い、直径約80cm、高さ約5cmの柱座をもつ。基壇は東西約19m、南北約16.1mを計り、基壇縁化粧は東辺にのみ遺存する。礫を多用しているが瓦積基壇とみられる。基壇高は平均約1.5mを計る。

西塔 (図版第4)

四天柱の礎石一基を損っているが、心礎、側柱礎石全てが遺存する。四天柱礎一基に蛇文岩を用いているが、心礎ほか全ては砂岩を用いる。心礎には直径約90cmの柄穴を穿ち、中心に、直径21cm、深さ21cmの舍利孔を穿つ。柄穴からは水抜きの小溝を刻む。側柱間には地覆の基礎として結晶片岩板石を用いたのべ石が遺存する。基壇は一辺約12mとみられ、東辺は、基壇縁最下段に礫を用いた瓦積が遺存し、階段の耳石と瓦積の施されていない間隔から幅約2.3mの階段をもつ。基段高は約1.2mを計る。

東塔 (図版第5)

心礎、側柱礎石二基が遺存するのみである。西塔と同じく210cm等間の塔とみられる。砂岩を用いた心礎は西塔と同じく直径約90cmの柄穴を穿ち、中心に西塔と同規模の舍利孔を穿つ。基壇は一辺約12m強(但し、心礎から基壇南面まで約6.3m)とみられ、南面に幅約2.2mを計る乱石積の

階段をもつ。基壇化粧は埴積で、高さ約1.4 mを計る。

中 門

基壇南面下底で幅約 15 m の乱石積の基壇が確認されていたが、今次の調査では基壇西面の一部が認められたものの礎石等の検出には至っていない。

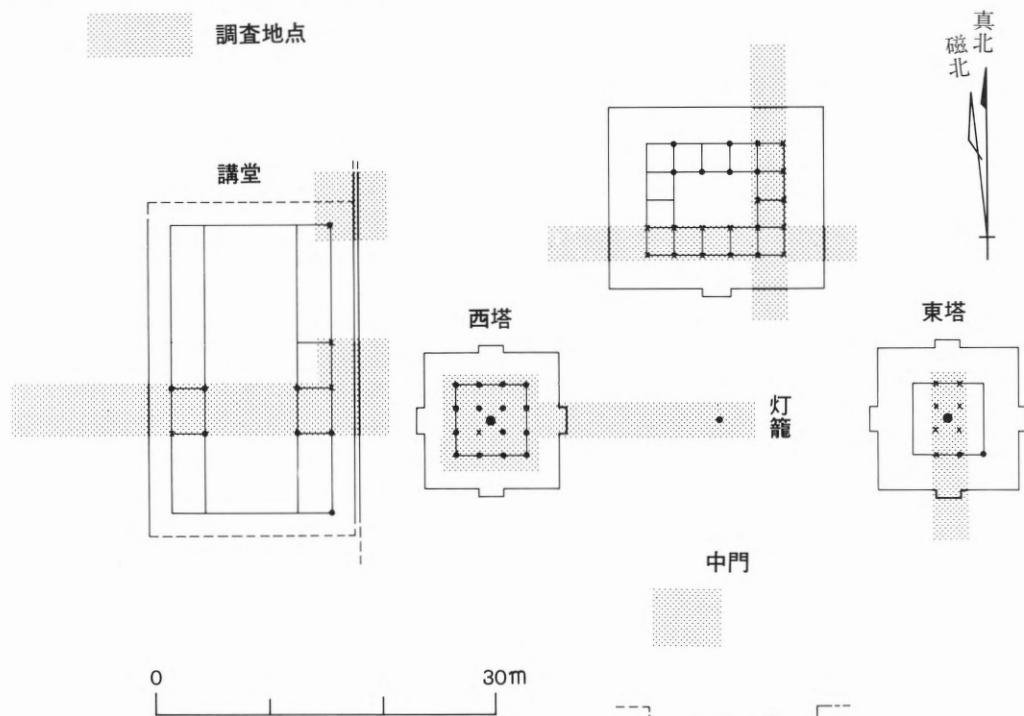
講 堂（図版第6・7）

西塔の西方に位置し、七間四間の東面する建物である。確認された礎石あるいは礎石抜き取り穴から梁方向では幅約 8 m の身舎部に約 3 m の底部がつく。桁行 7 間の隅柱間は約 25.6 m を計測し、中央間は身舎梁間の 2 分の 1 の約 4 m とみられるが、他は現在のところ不明である。高さ約 60 cm を計る基壇は東正面部では乱石積で外側に幅 40 cm の雨落溝をもつが、西面部では基壇縁化粧はみられない。雨落溝は北東隅部で素掘り溝となり北へのび、問題点を孕んでいる。

その他の遺構（図版第8）

金堂正面で、かつ東西両塔の midpoint で検出した大型の掘立柱遺構は、掘り方一辺約 1.25 m、柱痕径約 37 cm を計る。位置的にも掘立柱建物としては、掘り方、柱痕の規模が大き過ぎるうえに、掘立柱建物が建つ場所でもない所から木製灯籠の可能性が大である。なお、同様の遺構が佐野廃寺（伊都郡かつらぎ町）金堂正面でも確認されている。^{註②}

第2図 調査地点と伽藍配置図



5. 出土遺物

出土遺物の大半は瓦埴類で、軒瓦の組合せ2種・隅木蓋瓦片・鷗尾片・埴などがある。その他、須恵器・土師器・黒色土器などのほか、塑像片が一点出土した。

塑像片 (図版第9-4、第3図-1)

衣の衣文が表現されている小断片である。火中して焼けただけであるが、胎土は明るい褐色を呈するやや砂質気味の精撰された粘土を用いている。衣文のひだの幅は1.1~1.7cmであらわされている。金堂址基壇縁の瓦溜より出土した。

軒丸瓦

圧倒的多数を占める凹弁の子葉をもつ複弁八葉蓮華文軒丸瓦Aは、斜行三角縁に三条の沈線を施した面違鋸歯文をもち、中房は圏線であらわした座をもつ珠文が1・5・8と配されている。瓦当径は18cm前後で行基葺の丸瓦部をもち全長約45cmを計る。(図版第9-1・第10-1)

通有の凸弁子葉をもつ、残る一種の複弁八葉蓮華文軒丸瓦Bは、直立縁状に終る外縁端に緊密に珠文をおき、さらにその内部に面違鋸歯文を繞らす。突出した中房には、低い円座をもった珠文が1・5・6と配されている。瓦当径約17.5cmを計る。出土点数は2点(図版第9-2・第10-4)。ともに、瓦当側面に2条1単位の凸線を2単位に施しているが、前者には凸線を施さないものもある。

軒平瓦

軒丸瓦Aと組合せになる軒平瓦A-1は均正忍冬唐草文を配す。中心飾から左右へのびる唐草文はそれぞれ結節を1か所あらわし2回反転するが、その両端は瓦幅(約29cm)の規制のためか、殆どがカットされている(図版第9-1・第10-2)。この他に結節が2か所にあらわされ、やや大振りの軒平瓦A-2が2点確点できた(図版第10-3)。

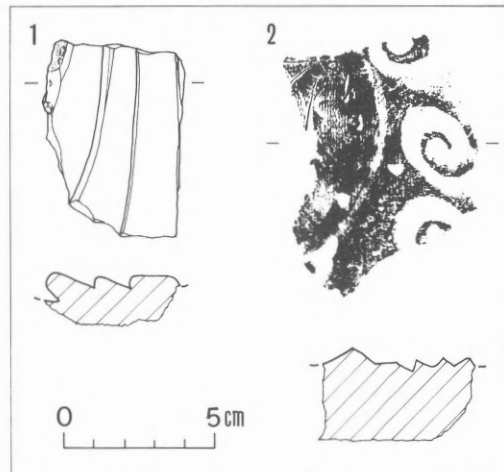
軒丸瓦Bと組合せになる軒平瓦Bは、蕾状の中心飾をもつ均正忍冬唐草文軒平瓦である。外縁には緊密に珠文を配し、軒丸瓦に即応させるものであろう(図版第9-2・第10-5)。

軒平瓦A-1は、軒丸瓦Aと同じように同種の凸線を施すものと、施さないものの2タイプに分かれる。A-2にはいずれも施されている。軒平瓦Bは凸線を施すものはない。

隅木蓋瓦 (図版第9-3・第3図-2)

講堂西側の瓦落層より出土したもので、五葉のパルメット文と火焰文からなる箱形の隅木蓋瓦の一部分で、パルメットを囲む図柄と火焰文が半肉彫りにされた須恵質焼成の小断片である。

第3図 塑像・隅木蓋瓦実測図



このほか、縦帯と鱗部を表現した鴟尾片・大小3種類の埴のほか多量の丸瓦・平瓦あるいは土器類が出土したが別途詳報したい。

6. 小 結

紀の川流域では、南海道あるいはその前身に沿って、7世紀後半代に多くの白鳳時代寺院が建立されたことは先にふれたとおりである。それらは、伊都・那賀・名草の各郡単位で使用された瓦当文様にまとまりがあることも明らかになってきた。^{註③}つまり、伊都郡の川原寺・本薬師寺系統、那賀郡の山田寺系統のように大和南部とのかかわりが強く示される。ただ、細部にいたっては、各系統瓦の競合もみられ細かな検討を要することはいうまでもないが、名草郡は上野廃寺に代表されるように、法隆寺の影響を受けたものと考えても大過なさそうである。

このように大和南部の諸寺院との関連から、各寺院の創建年代の検討がなされつつあり、上野廃寺にあっても、忍冬唐草文軒平瓦、あるいは、隅木蓋瓦の文様構成の比較・検討、あるいは`双塔の建築様式などの検討から、7世紀の後葉から7世紀末葉頃に考えられている。^{註④}また、これに関連して各堂塔の基壇縁化粧の差異などに建立の経緯を示すことも考えられる。しかし使用された軒瓦の組合せは、A類がその9割以上を占めるであろうことなどからも建立に関する問題は大きく、今後の調査・研究に委ねざるを得ない。さらに上野廃寺の建立後の経緯についても軒瓦類がA類の外にはごく少数のB類がみられるだけである点や、講堂址を中心に出土した9世紀代に入るのはないかとみられる黒色土器などとの関連も今後の調査あるいは遺物整理に残された問題である。

最後に、伽藍配置の上では講堂の位置と地形との関連、また回廊の位置あるいは規模など、やはり丘陵裾の傾斜地に造営された寺院の堂塔のありかたについても、今後の調査に期待する点は大きい。

註① 森 郁夫「上野廃寺の発掘調査」 佛教藝術 142号 昭和57年5月

註② 「佐野遺跡発掘調査概報Ⅲ」 かつらぎ町教育委員会 昭和55年3月

註③ 桃野眞晃・藤井保夫・久貝 健「和歌山県の古代寺院跡」 昭和52年12月

註④—1 註①に同じ

—2 稲垣晋也「和歌山県下出土の新資料三例」 佛教藝術 142号 昭和57年5月



1. 遠景(南より・紀ノ川の堤防から)



2. 近景(東より・正面の雑木林周辺)



1. 発掘前



2. 礎石列



1. 基壇東辺



2. 基壇北辺



1. 基壇東辺階段部(後方は講堂址)



2. 細部(北より)



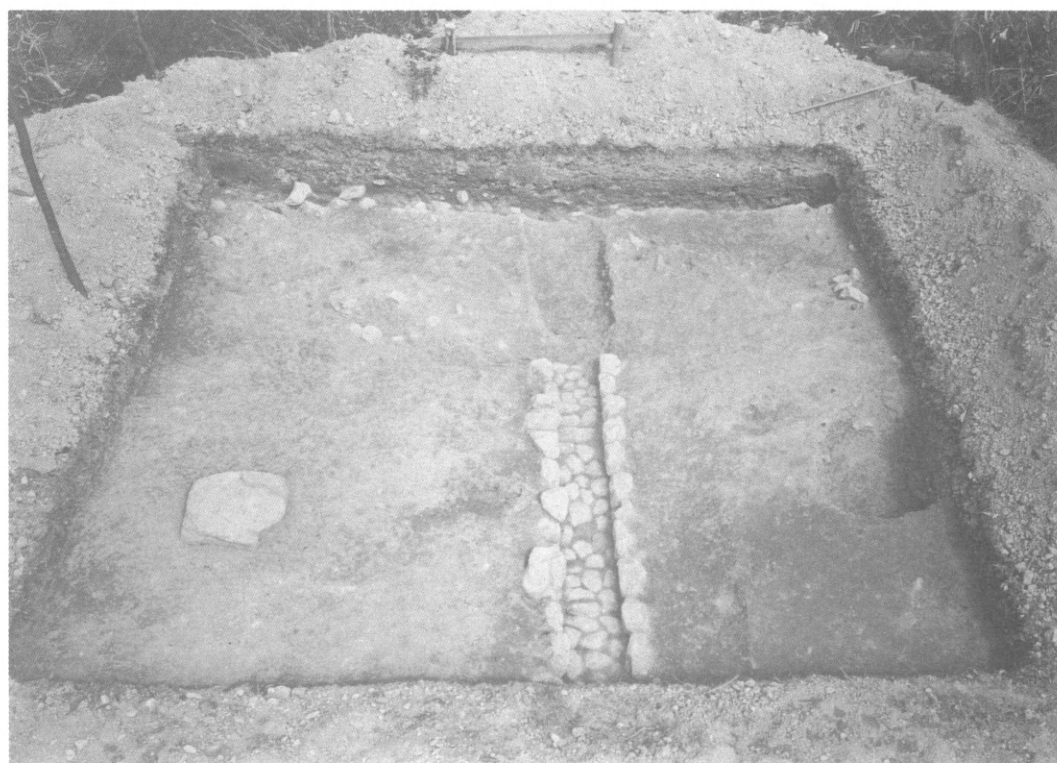
1. 心礎の遺存状況と側柱礎石抜き取り穴



2. 基壇南辺階段部



1. 基壇東辺



2. 基壇北東部



1. 基壇西面(瓦落状況)



2. 同上(向方は西塔址)



1. 位置(後方は西塔基壇正面)

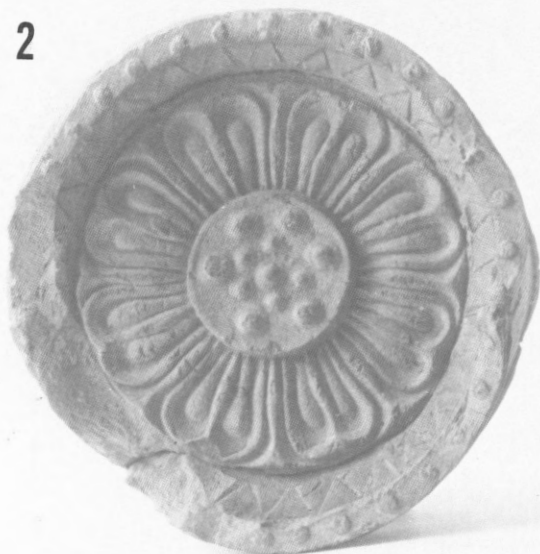


2. 細部

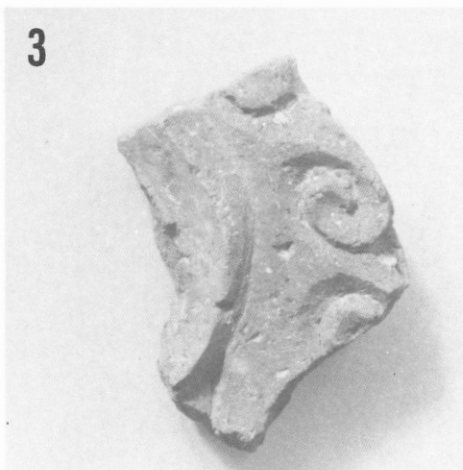
1



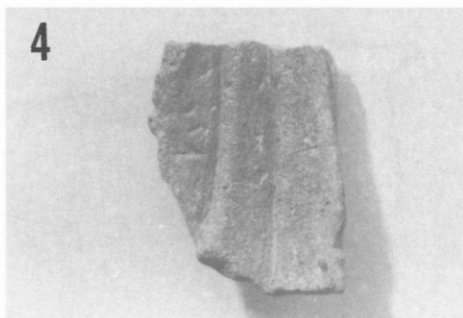
2



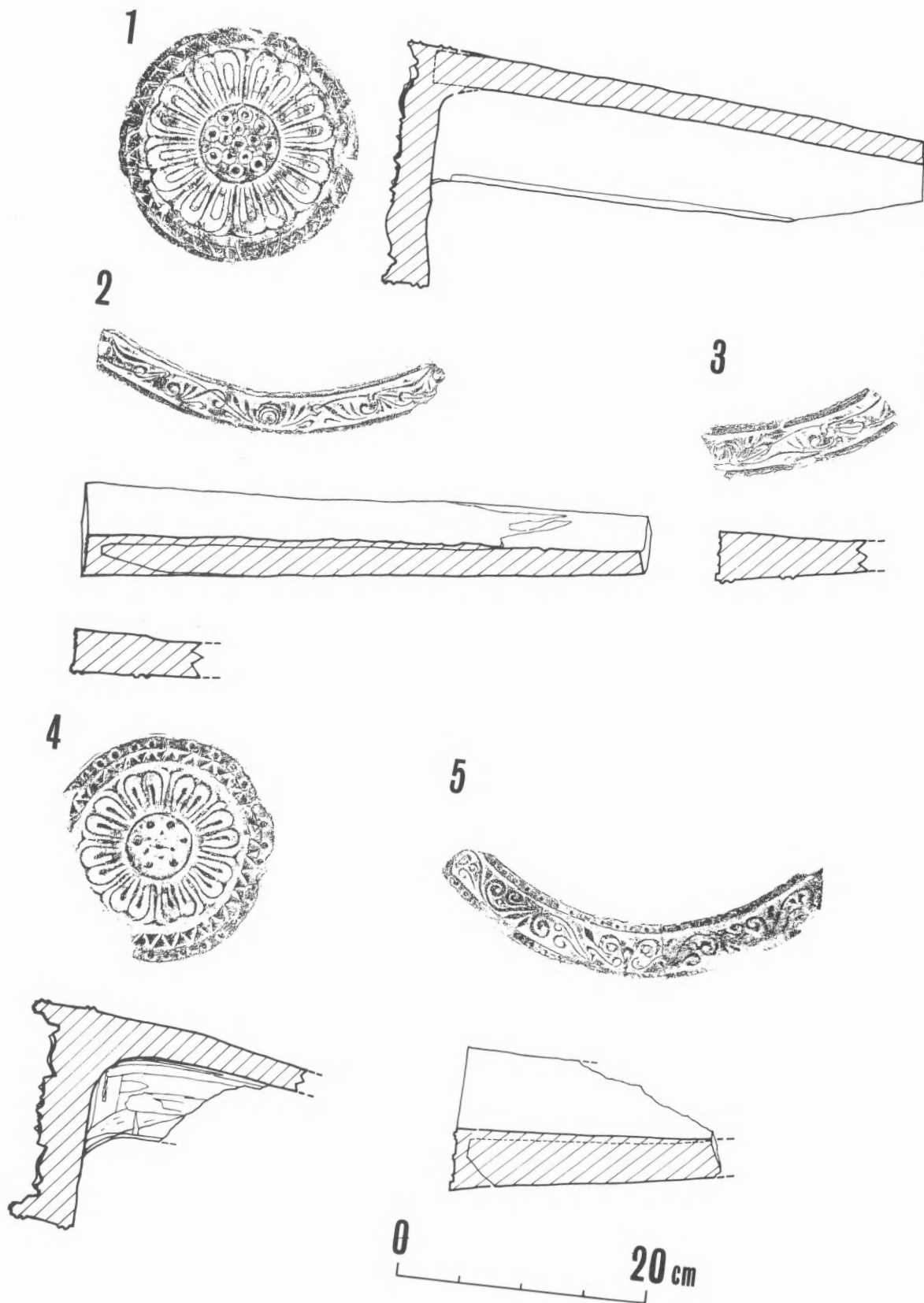
3



4



1. 軒瓦組合せ A 2. 同 B 3. 隅木蓋瓦片 4. 塑像片



昭和58年度 上野廃寺発掘調査報告 正誤表

ページ	行	正	誤
1	21 低 [・] 湿 [・] 地..... 低 [・] 湿 [・] 地.....
	23 微 [・] 高 [・] 地..... 微 [・] 高 [・] 地.....
3	20 蛇 [・] 紋 [・] 岩..... 蛇 [・] 文 [・] 岩.....
	24 /..... /.....
	28 基 [・] 壇 [・] 高..... 基 [・] 段 [・] 高.....
	32 柄 [・] 穴..... 柄 [・] 穴.....
5	6 精 [・] 選..... 精 [・] 選.....
6	23 寺院跡」佛 [・] 教 [・] 藝 [・] 術..... 寺院跡」昭 [・] 和.....
	 116号 昭 [・] 和.....	

昭和58年度

上野廃寺発掘調査概報

昭和59年 3 月30日印刷

昭和59年 3 月31日発行

編集 和歌山県教育委員会文化財課
発行 邦 上 印 刷
印刷